下野市（しもつけ）

（栃木県）

悠久の古代から育まれてきた暮らしやすさが基盤!!
地域資源の活用と市民満足向上で紡ぐ明るい近未来

古代から続く共通の歴史認識が生んだ「下野」の市名

下野市は平成18（２００６）年1月10日、旧河内郡南河内町、旧下都賀郡石橋町および同国分寺町の3町による合併で、新市としての歩みをスタート。今年1月に市制施行15周年の節目を迎えた。

栃木県の県都にして最大の都市・宇都宮市（人口51万７０００人強）と、県内第2の都市・小山市（人口16万７０００人強）の間に挟まれた下野市（人口6万人強）を構成する旧3町は、ＪＲ宇都宮線（東北本線）の石橋駅（旧石橋町）・自治医大駅（駅の所在地は旧国分寺町／駅東側に旧南河内町が展開）・小金井駅（旧国分寺町）、宇都宮線と並行して延びる一般国道4号線などの交通網を軸に、都市としての発展を合併以前から独自に続けていた。

県都・宇都宮市に隣接する市域北部の旧石橋町は、近世には日光街道の宿場町として大いに栄え、現在は宇都宮市への通勤客が多い地域だ。丸大食品株式会社や第一化成株式会社などの大企業が進出している工業団地が2カ所あり、雇用の場が多いことなどから、子育て世代の移住も多い。旧石橋町時代の昭和41（１９６６）年から続くグリム兄弟の故郷、ドイツ・ヘッセン州旧シュタインブリュッケン町（シュタインブリュッケンはドイツ語の「石橋」）との交流の成果として造られた《グリムの森・グリムの館（平成８／１９９６年竣工）》は、グリム童話の世界を濃厚に感じさせてくれる稀有な公共施設として、全国の童話ファンに知られている。

旧石橋町と旧国分寺町の東に隣接する旧南河内町には、「日本三戒壇」（戒壇／出家者に正式な僧尼の戒律を授ける神聖な場所を指す仏教用語）の一つとして名高い国指定史跡・下野薬師寺跡（現在は安国寺から寺名復古した医王山薬師寺）がある。飛鳥時代・奈良時代、それ以前の古墳時代の史跡も多く、多彩な魅力に満ちた田園地帯だ。

また、昭和47（１９７２）年に自治医科大学と附属病院が旧南河内町に設立されて以降、自治医科大学を核とするまちづくりが急速に進み、昭和58（１９８３）年には宇都宮線の新駅・自治医大駅も設置されている。自治医大駅の東側には、自治医大駅の建設とほぼ並行して進められていた土地区画整理事業により、昭和62

広瀬寿雄（ひろせとしお）
下野市長

「グリムの森」恒例のイルミネーションはまさにメルヘンの世界（11月末～1月末）

グリムの森を運営する「グリムの里いしばし」は今年、ドイツ連邦共和国功労勲章第一等功労十字章を受章

（1987）年に県内最大規模の住宅団地・グリーンタウンしもつけ（開発面積182ha、計画人口1万8000人）が造成するなど、市内随一の人口急増が見られる地域として今に至っている。

下野市役所も自治医大駅からほど近い場所にあり、実質的には自治医大駅周辺が、現在の下野市の中心市街地としての役割を担っているといえるだろう。

市域最南部に位置し、小山市と隣接する旧国分寺町は文字通り、下野国分寺・下野国分尼寺跡など、飛鳥時代から奈良時代を中心とする数多くの遺跡が現存している地域だ。同時に最寄りの小金井駅を起点・終着駅とするJR湘南新宿ライン（平成13／2001年開業）のダイヤが一部組まれているなど、新宿まで快速で約80分の通勤圏にあるまちとしても人気が高い。

前出の自治医大駅も、宇都宮発のJR湘南新宿ライン快速で新宿まで約83分、石橋駅は約87分で結ばれ、同様に都心部への通勤圏を形成している。宇都宮線にはまた、宇都宮駅と上野駅・東京駅を直結する、JR上野東京ライン（平成27／2015年開業）も乗り入れており、こちらは快速で小金井駅～東京駅間が約90分、同じく自治医大駅は約93分、石橋駅は約97分で結ばれている。

下野市の中心市街地の核をなす自治医科大学および附属病院

「交通至便な旧3町には、それぞれ独自の発展を遂げてきた経緯があるため、合併後は市役所本庁舎をどこに置けばいいか、公共施設の統廃合はどこを残し、どこを廃するかといった、主に一体化に関する部分で苦労した面も、少なからずありました。現在もその名残が解消されないままでいる部分もありますが、新市の名称は一致して、下野市ということで決まりました。その背景には、旧3町がかつての下野の国の中心地として共に栄えたという、共通の歴史認識があったものと思われます」

そう語る広瀬寿雄下野市長は、栃木県議会議員を14年間（4期目の途中）務めた後、市制施行の年でもある平成18年8月、初代市長の就任半年後の退任により、急きょ実施された市長選で初当選。それ以来、現在に至るまでの約15年間（4期）にわたり、下野市政をけん引してきた。

東の飛鳥・下野市の持つ歴史的ポテンシャルの大きさ

「下野という市名は、現在の栃木県のほぼ

日本三戒壇の一つ、下野薬師寺跡（現医王山薬師寺は隣接地）

律令時代の下野の資料が豊富にそろう「下野薬師寺歴史館」

青龍マークをあしらった「東の飛鳥ブランド」グッズ

全域を指す、律令時代に定められた国名・下野の国に由来しています。当時から伝わる遺跡は、本市と隣接する宇都宮市や栃木市、壬生町、上三川町など、県内各地にも豊富に遺されています。それだけに本市が発足する以前によくぞ、この由緒ある地名が市名や町名に使われてこなかったものだと思います。

しかし、その一方で、本市に現存する数々の歴史的遺産の質量のレベルの高さを見れば、下野の国の衣鉢を継ぐ下野市という市名に、本市ほどふさわしいまちはないとも自負しております」（広瀬市長）

実際、下野市ほど律令時代からの伝統を誇る下野の国名を継承するにふさわしい自治体は、他に見当たらないのも確かだ。下野市にそれほどに優れたものばかりだ。

下野市では近年、そうした豊富な文化財の保存と活用、まちづくりや教育および観光資源としての総合的な活用を図るための取り組みとして、《東の飛鳥プロジェクト》を展開している。

《東の飛鳥》の飛鳥とは文字通り、奈良を中心に展開された日本の古代・飛鳥時代の飛鳥のことで、《東の飛鳥》は下野市の観光振興はもとより、将来的な人口減少抑制のためのシティプロモーションの一翼をも担う、象徴的なキャッチフレーズだ。

「《東の飛鳥》とは、少々大げさではないかという印象を持つ方もいるかと思います。しかし、下野市には旧石器時代からの生活の痕跡があり、特に古墳時代から飛鳥・奈良時代、平安時代にかけて構築された、東国を代表する史跡が数多く遺っています。

律令時代における下野の国の国府跡こそ、お隣の栃木市にあります。しかし、下野市内には下野国分寺・下野国分尼寺跡、下野薬師寺跡など国指定史跡が4カ所あるほか、国指定有形文化財2点（工芸品、考古資料）、さらに県・市指定の有形・無形文化財、民俗文化財などを合わせると計106点あり、古墳や埋蔵文化財なども含めれば、総計500点以上にも上ります。

それらの史跡は50年以上にわたり、県・市・町の調査が重ねられてきましたが、過去の災害の痕跡は見つかっておらず、この成果は本市がいかに安全で住みやすい地域であったかを物語っています。

このように、飛鳥時代を中心とする仏教文化を伝える、重要な文化財の数々が、東国の飛鳥ともいえるほどの質量で遺されているということなどを背景に、平成31（2019）年に開始した、歴史を生かしたまちづくりのプロジェクト名を《東の飛鳥プロジェクト》とさせていただきました。本市ではそれ以前の平成28（2016）年度から、下野市歴史文化基本構想にのっとった歴史を生かしたまちづくりを展開しておりましたが、《東の飛鳥プロジェクト》は、その実績を基盤に、バージョンアップした形での歴史の発信事業となっています。また、この飛鳥を使ったプロジェクト

名を決定するに際しては、本家の奈良県明日香村にもお伺いを立て、ご快諾をいただくことができました」（広瀬市長）

下野市では、《東の飛鳥》を登録商標として申請し、令和元（2019）年5月に認定を受けている。同時に、《東の飛鳥》の表記や「東を守る神・青龍」をデザイン化したマークをあしらったトートバッグなど、7項目40点にわたる商品を《東の飛鳥ブランド》第1弾として、独自に認定している。

また、今年5月2日には、下野国分寺跡・下野国分尼寺跡などを含む天平の丘公園内に建つ《しもつけ風土記の丘資料館》がリニューアル・オープン。下野国分寺跡に隣接する甲塚古墳で出土した、他に類例を見ない「機織形埴輪」（女性が機織りをしている様子をかたどった埴輪）など、新発見も交えた貴重な資料が多数展示され、各方面からの注目を集めた。

都から本州を縦断していた奈良時代の幹線道路・東山道跡（公園の看板の向こう側）

持続可能な未来のキーワードは「悠久の暮らしやすさ」

さらに、奈良・東大寺、大宰府・観世音寺と共に「日本三戒壇」の一つである下野薬師寺では、三戒壇を築いた鑑真和上の遺徳を讃えるため、かねてより地元の仏師に依頼し、国宝・鑑真和上像（唐招提寺）の模刻を進めていた。それが今年完成し、取材後の10月10日に開眼法要が執り行われた。

また下野市では、市内のあらゆる文化財をサイト上で体験できる《下野市文化財バーチャルミュージアム》を公開している。同サイトにアクセスすれば、年間を通じて24時間、下野市の文化財の画像や文書資料などにもアクセスできる素晴らしいシステムだ。

悠久の「時」を感じさせる下野国分寺跡（下野国分尼寺は隣接地）

こうした貴重で豊富な文化財に関する全ての発信活動が、古代から続く下野の国の一大特徴を発信するシティプロモーションの役割をも果たしている。その一大特徴を一言で表現すれば、「悠久の歴史が証明する暮らしやすさ」ということになるだろう。

下野市は現在、「第二次下野市総合計画・後期基本計画」（令和3年度～7年度。以下、後期基本計画）に基づく市政運営を実践中で、近未来の地域課題となる人口減少抑制などに向けた重点施策に「①魅力的で安定した雇用を創出する」「②東京圏からの新しいひとの流れをつくる」「③若い世代の結婚・出産・子育

「しもつけ風土記の丘資料館」内の「古代の食コーナー」

天平の丘公園の名木・淡墨桜（うすずみざくら）をはじめ下野市は桜の一大名所（写真は花まつりの模様）

ての希望をかなえる」「④安心なくらしを守り幸せを実感できるまちをつくる」を掲げている。そして、この「後期基本計画」の策定に先立ち、下野市では市内在住の中学生と高校2年生相当の市内在住の若者を対象とする「中学生・若者アンケート」、18歳以上の市民を対象とする「市民意識調査」を実施している。

「その結果、中学生の回答者の80・1％、若者の回答者の77・3％が、下野市を『好き』ないし『どちらかといえば好き』と回答しています。同時に中学生の87・7％、若者たちの90・3％が『下野市は住みやすい』ないし『どちらかといえば住みやすい』と回答しています。また市民の77％が『下野市での生活を幸せだと感じる』ないし『どちらかといえば幸せだと感じる』と回答しています。

下野市のエリアでは、旧石器時代から人々が暮らし、古代に多くの古墳が築かれるほど有力な豪族が次々と本拠を構え、飛鳥・奈良・平安時代にかけて下野薬師寺や下野国分寺、下野国分尼寺などの壮大な伽藍（がらん）の寺院が集中して建設されるような、いわば当時の都市圏が時代ごとに形成されてきた歴史を有しています。

その背景にあるのは、下野の国のいろいろな意味での暮らしやすさだったと考えます。

そういう意味からも、世代を超えた市民の意識調査結果にもあるように、暮らしやすさの伝統は地域のポテンシャルとして、今も受け継がれてきているのだと、意を強くしております」（広瀬市長）

その「暮らしやすさ」はもちろん、気候風土のような天然自然に与えられる恵みばかりではない。天然の恵みを生かしつつも、常に人々の知恵を時代ごとに加え、結集してきた歴史のたまものだろう。

次々打ち出される先見性に満ちたまちづくり施策・事業

ところで、下野市の人口は合併時（平成18年）の約5万9000人から微増を続け、今年9月末現在では合併時より多い6万人強を維持している。国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）による平成22（2010）年時点の予測では平成27年から減少に転じるとされていた。同じく社人研の最新予測では、令和2（2020）年以降、減少傾向に移るとも予測されていたが、栃木県市町村課が発表している令和2年の県内の市町村別人口動態では、前年比0・1％の微増ながら、県内では下野市が人口増加の大きい都市として特筆されている。

下野市政の重要な情報発信源であるFM「FMゆうがお」の特別放送の模様

市制施行15周年を迎えた現在、この傾向は心強いものといえる。しかし、だからこそこの時期に《東の飛鳥》のキャッチフレーズの下、古代から現代に至る地域の歴史を改めて検証し直し、持続可能なまちづくりの源泉である「地域の魅力」として、積極的に発信していくことは、単なるイメージ戦略にとどまらない効果を持つはずだ。同時にそれは、合併以来の一体化のさらなる促進や、今後予測される人口減少の抑制といった「現代および近未来の地域課題を克服するためにも、非常に重要な意味を持つ取り組み」（広瀬市長）といえるだろう。

今年は昨年から続く新型コロナウイルスに

よる感染症拡大と、それに伴うまん延防止策や緊急事態宣言などの影響から、下野市ではせっかくの市制施行15周年のお祝いも十分にはできなかった。

だが、これまで述べてきたように《東の飛鳥プロジェクト》などによる発信活動を積極的に実践し、観光振興や将来的な人口減少抑制のための布石も着実に遂行してきた。

その成果は緊急事態宣言やまん延防止などが9月末をもって解除された「これから以後」にこそ、効果を発揮していくことだろう。

また、その際には地元の高校生たちが制作した《石橋駅周辺街歩きマップ》（とちぎ高校生地域定着促進モデル事業）や、《東の飛鳥プロジェクト》の一環で下野市文化財課が制作した、市内全域の歴史・文化のポイントを非常に見やすくまとめた《れきぶんマップ》などの地道な努力も大きな準備となり、交流人口の増加などに一層の効果を発揮するはずだ。

一方で、下野市では「下野市テレワーク移住促進補助金」（月額5万円が上限）の交付制度を今年4月に開始した。東京圏からテレワークを行うため移住した人への家賃を半額補助する制度だ。これもまた「これから以後」の移住・定住促進の動きへの好影響が見込まれる。

下野市は日本一のかんぴょう産地（写真はかんぴょうの実・ふくべ）

「道の駅しもつけ」でも「かんぴょうコーナー」は大人気

それから、いかにも下野市らしい発信活動の一つとして注目されるのが「かんぴょう条例」の策定（令和2年3月）だ。

「栃木県はかんぴょう生産量が全国の99％を占めています。下野市はその62％を生産しており、日本一のかんぴょう生産地です。しかし近年、かんぴょうの消費量は落ち込み、生産者の高齢化もあり、産業としての持続が心配されています。そんなことからかんぴょうの消費を拡大するために策定した条例ですが、江戸時代中期から続くかんぴょう名産地としての発信も、田園都市としての下野市のもう一つの顔の発信になるものと、期待しております」（広瀬市長）

また、新型コロナウイルスの感染症拡大に伴い、今夏の東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会では、外国選手団の事前キャンプ地として約定されていた事例のキャンセルが相次いだ。しかし、下野市では予定通り7月にキプロス選手団が来着。市内の陸上競技場などでトレーニングが行われたほか、オンラインではあるものの、市民との交流イベントなども随時開催され、「貴重な夏の思い出として、市民の心に生涯、深く刻まれる体験」（広瀬市長）となった。

コロナ禍に揺れる時代背景の中、自らが持つ数々の地域資源を活用し、市民満足度の向上と持続可能な近未来を実現するために、多彩な施策・事業を実践し続ける下野市は、古代から続く悠久の暮らしやすさが支える《前向きな元気》に満ちている。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和3年9月24日）

東京2020オリパラの事前キャンプを下野市で張ったキプロス選手団のリモートによる子どもたちとの交流